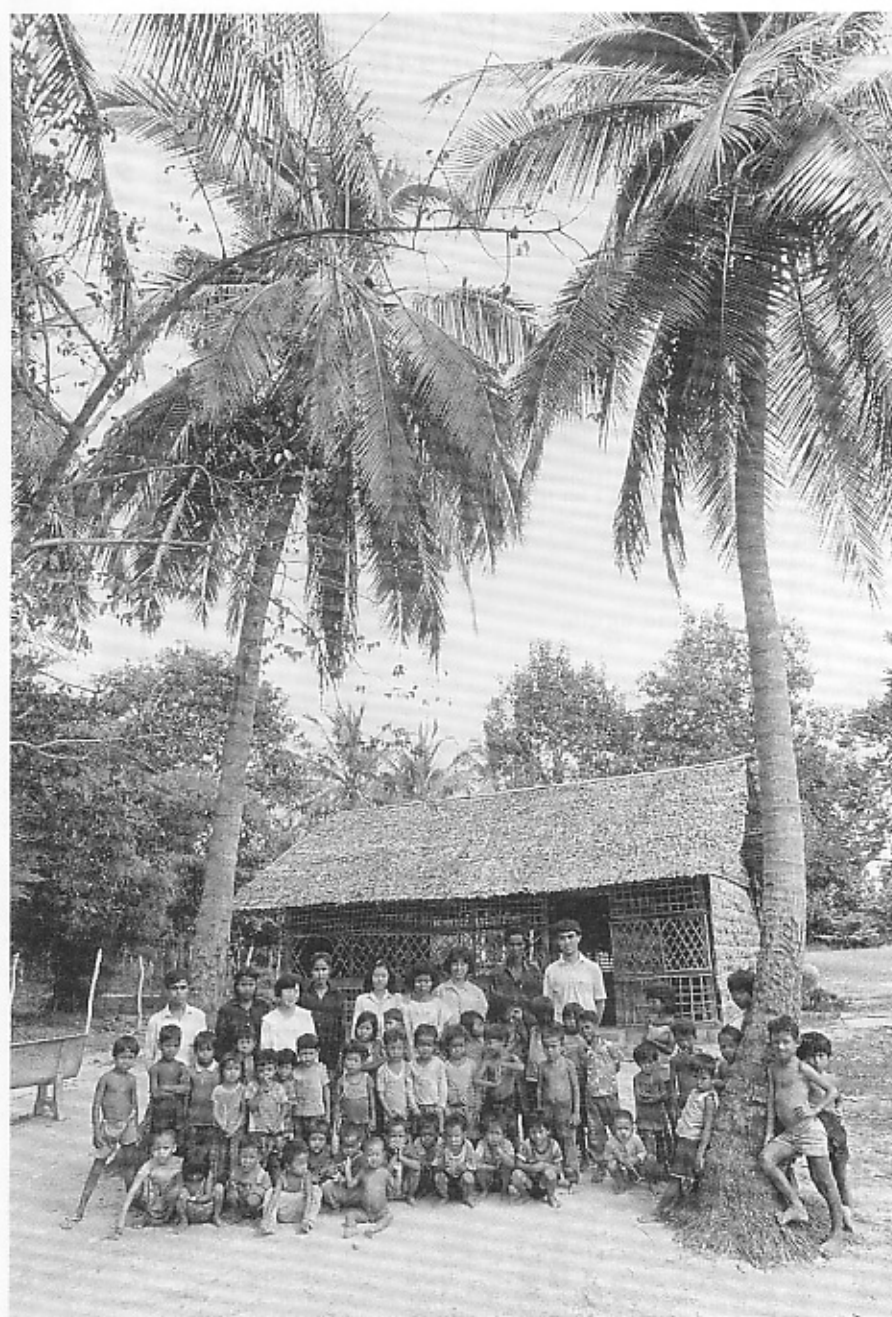


Children, Our Future



CARING FOR YOUNG REFUGEES
幼い難民を考える会

子どもたちの明日



CYRNews No.35
ニュース 1994年12月

タイが開いた私の世界	2
Thailand Opened Up My World	
ボランティア なぜ続けるのか?	4
Volunteer Work, Why I Continue It	
家族でできる国際交流	6
International Exchange as a Family	
しくろ通信	7
Cyclo News	
小林正典さんが見た援助活動	8
International Aid Activities as Seen by Masanori KOBAYASHI	
CYRの資金は どのように使われているか?	10
How are CYR Funds Spent?	
最新情報	11
Latest Developments	
バライ村で実を結ぶ国際ボランティア貯金 The Grants for children's program in Parai Village	

プレイタトゥ村 (カンボジア) Pray Ta Touch Villages, Cambodia

表紙写真: 小林正典 Cover Photo: Masanori Kobayashi

タイが開いた 私の世界

「自己発見への手がかりとしての国際参加プログラム」をテーマに、短期研修に参加した11名は、9日間をタイで過ごし、8月14日帰国した。彼らを自宅に受け入れ、共に過ごしたタイの村の人たちに感想を聞いた。

帰国した今

参加者11人の得たもの

村での農作業、保育園の遊具作り、宿泊先での生活など、9日間の研修を終えた11名は、タイの村で何を学んだのか、得られなかったのか……。この体験で開かれた彼らの新しい世界とは、どのようなものだろうか。

青野徳子 親の手づくりのボール、父親の協力でつくられた外遊具、熱心な若い先生……。

築地和子 今までの自己や価値観は何だったのか、なんと狭義だったのかと感じた。生きる喜びは物質を求める事ではないと次の世代に伝えたい。

久保美希子 毎日を楽しいといふ足立った気持ちで過ごし、いい面ばかり目を向けることが多く、人々が抱えている問題に触れようとしなかった。

小池敏朗 小池敏朗 日本にいる私の小さきを感じた。ゆっくり時間を使い、周りのことを色々気にするのはなく、自分の意志で行動していくことを学んだ。

西澤豊 相手を理解しようとする努力が大切なことを、今回学んだ。そのことにより、自分の日本人としての固い殻を壊していきたい。

後藤今日子 タイ語が耳に慣れ、わかったような気になる。相手を知りたい、自分を知ってほしいと思うだけで、こんな事ができるんだと体験した。

佐藤里佳子 村の生活が昔の日本を想像させた。農村地域社会がきちんと残っているため人々の信頼関係が強く、純粋な心に触れることができた。

青野徳子 子どもの心から愛している事が伝わってきた。母

の信頼関係が強く、純粋な心に触れることができた。

本当の娘のように……

チャオワリット・
チャイラト (73歳)
タブリック村



またぜひ来てください

ライ・ボンシング (26歳)
バライ村



anything they ate, they said "Seab, Seab" ("delicious" in a dialect in northeastern Thailand). How did they know Thai dialect? Where did they learn it? The way they "wai" (placing palms together to gratitude) before and after the meal was very beautiful to look at. It was like our ways of greeting and I felt very close to them.

We had no language problems. They could speak a bit of Thai and we used the book when we could not understand each other. I was so happy to receive their letters after they went home.

"Please come again."

Mr. Lay Pongsing (26 years old)
Parai Village

They became friends with children immediately; they played a lot and laughed a lot. My daughter cherishes the stuffed toy given to her. They were so serious in making toys at the Child Care Center, and helped with work in the field even though it dirtied their clothes. I hope they were not tired.

Please come again, and stay longer the next time.

あーとてもなつかしい、もう一度来てほしいねえ。今度はいつ来られるのかね？ 私は泊まった二人を、自分の本当の娘のように思っているんだ。初めから心配はなかったけど、二人は食事やトイレ、水浴びにもすぐに慣れて、気持ちよく過ごしていたね。だから私も特に気を遣うこともなかったよ。よく食べ、よく眠っていたようだった……。ごはんは何を食べても「セアアップ、セアアップ」(タイ東北部の方言で、おいしいの意)と言っていたが、どうして方言を知っているのかね？ どうして覚えたのかね？ それから食事の前とあとに手を合わせる姿がとても美しく、私たちのワイ(合掌)に似てい、

子どもとはすぐに仲良くなり、よく遊び笑っていたよ。お土産にももらったぬいぐるみを、娘は大切にしています。保育所でのおもちゃ作りは、とても熱心にやっていたね。服が汚れるのも気にしないで、畑仕事まで手伝ってくれたよ。疲れなかったかな？
またぜひ来てください。今度はもっと長く居てほしいね。
ーで、親しみを感じたよ。
言葉は、二人がタイ語を少し話せたし、わからない時は本を使ったから、それほど困らなかった。あとで手紙を受け取って、とてもうれしかったよ。

THAILAND OPENED UP MY WORLD

The short term study for "Participation in International Program as a Key to Selfdiscovering" was held for nine days in Thailand and its 11 participants returned home on August 14th. The villagers who received the participants to their homes told their impressions.

"Like real daughters ,,,,"

Mr. Chawalit Chairat (73 years old)
Tapphrik Village

Ah, I miss them so much! I wish they would come again. When will they come next? I thought the two who stayed with us were like real daughters of mine. Although I didn't worry from the beginning, they got used to meals, toilet and bathing and enjoyed themselves. So I didn't have a care. They slept well and ate well...

「比べる」ことから 「違い」の理解へ

岩佐桂子

一週間という短い期間ではあったが、今回のタイは、私にとっては初めての外国ということもあり、何もかもがとても新鮮に映った。

アランヤプラテートはとても活気があり、日本人である私たちは彼らにずっと見られていた。やはりここまでくると外国人は珍しいようだった。市場はともおもしろかった。日本人の感覚でいくと、とても衛生的とは思えないようなものも気にならな



FROM "COMPARING" TO "UNDERSTANDING DIFFERENCES"

Keiko IWASA

Although it was for just one week, everything was new to me in Thailand. This may be because the visit was my first trip abroad.

Aranyaprathet was bustling with activities, and people stared at us Japanese. Maybe foreigners are rare presence there. The market was so interesting. I got used to many things which were not hygienic to ordinary Japanese persons, and I accepted insects which I normally make a big fuss of avoiding. It was amusing to find my ways of sensing things changing so much.

Soon after my return from Thailand, I went to the United States on a personal trip and there I felt very strongly that Japan was an Asian country and I am one of the Asians. I felt that culture was not for comparing advantages and disadvantages, but is for understanding and appreciating "differences".

Having completed my study, I hope that I can benefit from what I had seen and heard during the study and also that I should try more than ever to learn a lot of things and to have people know more about Japan.

くなったり、大嫌いな虫を見ても、いるのが当然と思えたりと、自分の感覚が大きく変わっていくのを発見しておもしろく思った。

タイから戻ってしばらくして、私は個人的にアメリカに行ったのだが、そこで強く感じたことがあった。日本はやはりアジアの国であり、私はアジアの人間なのだということ。文化は善し悪しを「比べる」ものではなく、「違い」を理解するものであるということを実感した。

研修を終えて、これから自分が見て聞いて感じたことを生かしていきたいと思うと同時に、もっともっとたくさんを知りたい、また日本のことも知ってもらえる努力をしていきたいと思った。

いつも世界に 目を向けて

近藤健二

パライ村での宿泊では、村の様子がわかったということ以上に、村の人々のやさしさが伝わってきました。言葉が自由に話せないからこそ、相手を思いやる気持ちと笑顔というのがとても大切なのだと感じました。

村の子どもたちとはよく遊びました。無邪気さをなくしていつている部分もある日本の子どもたちも、本質はそれほど変わらないと思います。遊びが好きで、



ALWAYS LOOKING AT THE WORLD

Kenji KONDO

During my stay in Parai village, I felt gentleness of the villagers more keenly than I learned about the life in the village. Because we could not communicate well with words, thinking of others and smiles were all the more important.

I played a lot with village children. Japanese children who appear to be losing their innocence are not so different from Thai children in essence. Children like to play, their faces look so happy when they are playing, and they are so earnest when they play.

I hope that I can establish some kind of international exchange through these children. Taking advantage of my work, teaching, I wish to assist children to take part in international exchange. Two Chinese children were enrolled in my class from the second term. Both they and their parents cannot speak Japanese. I am sure that spending time together with them at school will be a great experience for me and my pupils.

I will continue looking at the world and think about it even while I am in Japan.

遊んでいる時の顔が楽しそう、そして一生懸命遊んでいる。

今、そんな子どもたちを通して、何か国際交流をしていけたらと考えています。教師という自分の仕事を生かして、子どもたちに伝えるだけでなく、子どもたち自身が交流していける手伝いができればすばらしいと思います。二学期から、私のクラスに中国人の子どもが転入してきました。ご両親も子どもも日本語が全く話せません。一緒に学校生活を送ることは、自分にとって、子どもたちにとっても、いい経験になると思います。日本にいても、いつも世界に目を向け、考えていきたいと思っています。

■滑志田ひとみ

私は小学生の男の子が二人いて、ふだんは仕事をしていますので、事務局でのお手伝いはできませんが、イベントがある時に参加しています。私は子どもにもCYRのことを話したいと思っていますし、子どもが難民の人たちを自分の仲間という視点で考えることができればいいなと思いますので、時々、子どもをイベントに連れてきたりしています。

CYRの職員や、ボランティアの人たちと話をしたり、タイの人や日本に定住した難民の人たちと交流するのとても楽しく、今のところは楽しむところだけに関わっているような気がします。

スタディツアーに参加して、タイで職員の人たちや、タイの人たちと顔を見合わせながら交流できたのが嬉しかったんです。相手が見えるというのが、NGO（非政府組織）

のいいところだと思いました。相手が見え

ると、やってあげるのでなくて、一緒にやる、友だちとして何かできることはないかという形で関わると実感しました。

本日はCYRの職員になりたいと思っていて、子どもに「おかあさん、カンボジアに一年か二年、行って来ていいかな？」と聞いたら、二人にそろって「だめ」と言われましたが、タイに行った時に、緑の中で、土の上で生活して、これが私には合っているなと感じました。

■飯田哲也

どのNGOに参加したらいいのかわからなくて、パンフレットを集めて比較した結果、CYRのやっていることに賛同して、少しでもどんな形でも参加できたらと思っています。

事務局で写真整理や宛て名書きなど、事務補助を主にやっています。できることは

何でもやって、CYRの活動に対して理解を深められたらいいなと思って、なるべく仕事を選ばずにやっています。自分がやる気を示せば、そこを評価してもらるので、やりがいがあるって、ボランティアとしても充実しています。

今年の夏、インドシナの人たちと日本人たちが交流するキャンプに参加しました。男の人たちとはビールを飲みながら、ざっくばらんにいろんな話ができて、非常に有意義でした。昼間は子どもたちと汗をかきながら遊んで、大変楽しかったです。貴重な体験だったと思っています。

僕は家が遠くて、仕事が忙しい時は大変だなと思っています。それは自分の体力でカバーすればいいんですが、職場で付き合いがあるとお酒を飲むのとCYRに行くのとどっちを選ぼうかなと、基本的にはCYRを選んでいますが（笑）。事務局への要望としては、やってほしいこと、やるべきことをきちんとボランティアに伝えて、仕事を与えてほしいと思います。

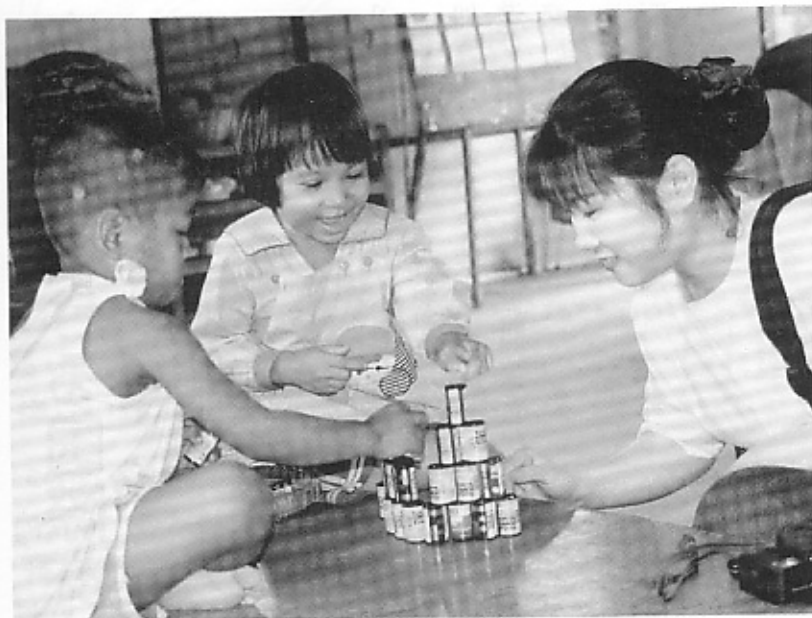
■及川さやか

日本の保育園で何日か勉強してタイに行ったのですが、そこでは、ボランティアと職員の区別はないので、素人が行って「私にはこれできない。」というのは許されな

ボランティア なぜ続けるのか？

前号の「ボランティアを話そう！」に続けて、CYRでボランティアをしている人たちに、日頃感じている悩みなどを聞いた。

VOLUNTEER WORK,
Why I Continue It



いことがわかりました。身近にある新聞紙などを利用して、紙笛や紙粘土など、子どものおもちゃ作りをしてみました。中途半端な気持ちでは、他人の、しかも文化も習慣も違う人の生活には関われないと痛感して、悩むことが度々ありました。でも、子どもが私の作った物を見よう見まねで同じ物に作り上げて、できたと言って喜んで顔をみたら、悩みも吹き飛んでしまうような体験でした。

この体験を日本でどう生かすかですが、身近な東京の事務局で、掃除や写真整理などをしながらボランティアを始めて、自分でできることをやっていけばいいと思っています。

■小島美子

私のような年齢になると、なかなか自分の世界を広げられないのですが、CYRのボランティアをやっていると、いろんな人たちに会えて、世界が広がって楽しいですね。

私が一〇年も続けていられるのは、他のボランティア・グループと違って、最終的な責任を事務局がとってくれるので、わりと気楽にできるということです。求められる時に行って、バザーの手伝いや発送作業などを一生懸命やればよいというところ

■愛敬千佳子

タイの学校、保育所などで、図書活動を手伝ってくださると、事務局の方に言われた時に、一度タイに行ってみないといけないと思っただけです。けれども、私はそこでどんな顔をしたらいんだらうかと考え込んでしまったのです。

私の場合は、娘が大学一年の時に大病をして、その後遺症で障害者になり、大学は中退せざるをえなくなりました。娘の希望は、子どもに関わる仕事で何か役に立ちたいということでしたから、この会に巡り会えたことはとても幸せだったと思っています。

この会の趣旨として、物や金を送るのではなく、その国の人たちがよりよい生活をするにはどうしたらいいかを一緒に考えて、その手助けができたという目的があります。会の趣旨に賛同するのはもちろんですが、障害者を何のこだわりもなく受け入れてくださったことを、とても感謝しております。

東京の事務局に通い続けて二年になりました。資料の整理をしたり、ハンコを押したり、封筒に何かを入れたり、ワープロを打ったりとか、イベントの手伝いなど、その時々求められることをやって帰ります。これでいいんだらうかといつも思います。これからの疑問は解けないと思います。考えながらやっていきたいと思っています。



家族でできる国際交流

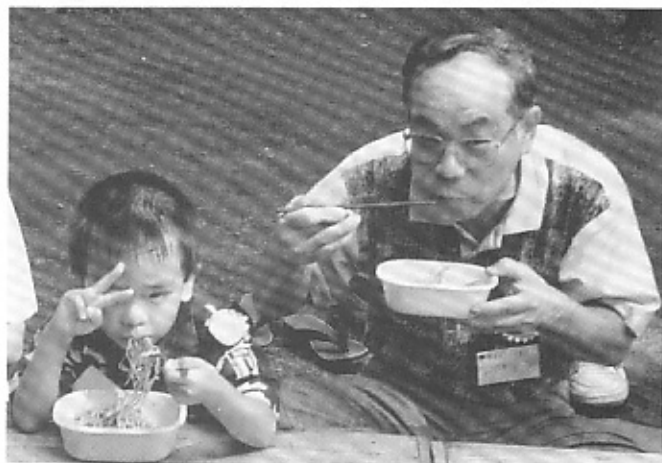
—富士のふもとの即席家族—



八月二八日・二九日、ベトナム・ラオス・カンボジア
 ・日本の家族が、二日間だけの大家族を体験した。参
 加者は、三歳から八一歳までの七一人。子ども同士は
 遊びながら、おとなは世間話をしながら、小さな国際
 交流を実現した。



え：フォク・バクくん（8歳）



お互いを身近に実感

矢崎勝彦

全く初対面の人たちが、当日直接バスに乗り合
 せるといふ、少々荒っぽい出会いでしたが、結果は
 何の違和感もなく楽しい集団生活を過ごせました。
 この即席大家族は、共同作業でタイ米中心の料理
 を作り、それを向かい合っておいしく食べ、きれい
 に後片付けをし、また、夜は大部屋で枕を並べて雑
 魚寝をすることにより、お互いを身近に実感するこ
 とができたと思います。

こうした体験は、日常生活の中では得難いことで
 あり、「世界の人びとの間に相互理解の精神をつち
 かい、発展させる」よい機会となりました。

（習志野中央ライオンズクラブ会長）



しくろ通信

カンボジア・プノンペン発 CYR 野村美知子
 “しくろ”（カンボジア版人力車）に乗せて送る
 手描きの生活スケッチ。

プノンペンには、古い、姿の美しい館が たくさんある。 Oct. 18 '94
 (大半は、壁が、はげている。数家族、時には 数十家族が同居しているのだけなど)
 この街に、暮して 二年余、そぞろ交代という頃になると やと 自分ごとを描いてみよう。
 という 余裕ができた。日曜日の朝、シクロに乗って、めばしい館の近くに行くのである。
 描いていると、必ず 子どもが、おとなが 集って来て、いろいろ話が出来る。

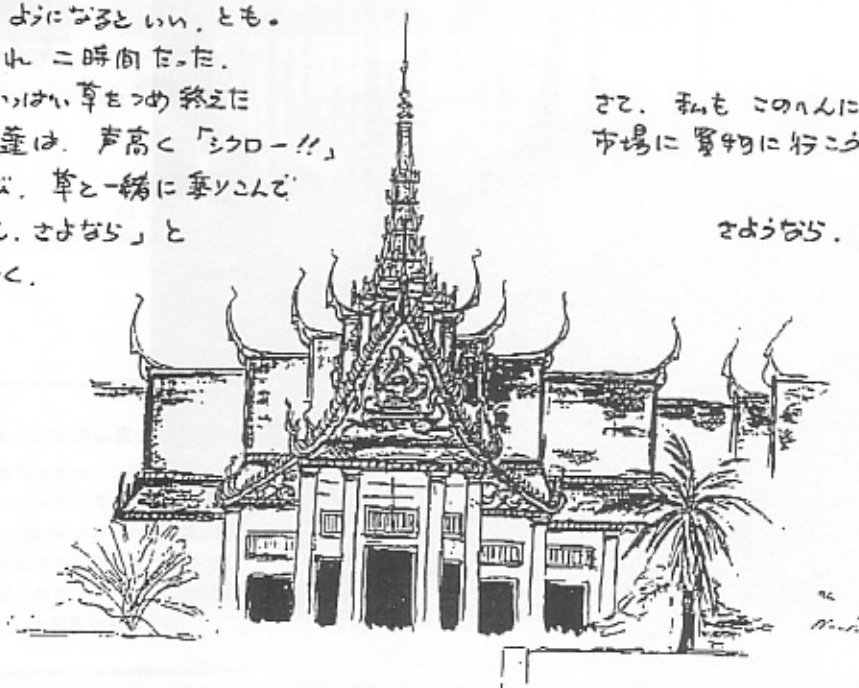
この向の日曜日は、国立博物館を描きに行った。全体が赤い、炎のような建物である。
 (中には、アンコール時代の、すばらしい彫像がある)
 博物館正面の草地にすわりこむ。朝 7時、10-12才くらいの男の子たちが、牛や馬にやるといふ
 草を刈っていて、いいにおいがする。自転車一台に 四人でかぶるがゆる乗って遠くから来たのだ
 とのこと。草を刈りながら、時々、「よちだぬえ」などと のぞきに来る。
 体を つけんばカツにのぞきこむので、来る度に 息が弾んで行くのがわかる。
 この緑地(空地)の草を刈るのに、なんと 隣りの王宮の警備兵に、お金をもらうのだそうだ。
 「ナイショだよ」 うん、公然のね。

車椅子の若者が来た。コンホンスプー生れ、90年にコンホンスプーで兵隊に百リ。
 地雷で両足を一度に失ったとのこと。近くの病院に入院して、体にのこっている破片をとり出す
 手術をするのだが、運命に出ることも許されて いるのだそうだ。若者は、
 とにかく、戦争があるのが いけない。戦争をええわければ、と カ説する。
 おかし 健康になると、お金もどきたら、英語をきちんと習い、新聞スタンドを 経営する
 希望を 持っている。と 言う。 自分の国の きれいな建物の絵を、カンボジアの子ども達が
 描ける ようになるといい、とも。

かよこし 二時間たつた。
 麻袋いっぱい、草を つめ終えた
 男の子達は、声高く「シクロー!!」
 と呼び、草と一緒に乗リこんで
 「おぼさん、さよなら」と
 帰って行く。

さて、私も この人にして
 市場に 買物に行こう。

さようなら、またね!



カンボジアの村から

小林正典さんが見た援助活動

難民の取材を通じ、世界的なフォト・ジャーナリストとして知られる小林正典さんが、去る9月、第二回国連写真家賞を受賞した。この賞は国連環境計画が、国連の活動に貢献した写真家に贈るものである。

小林さんとC Y Rの関係は、10年前のカンボジア難民キャンプの写真取材に始まる。世界の難民問題を長年取材してきた小林さんの写真には、C Y Rの活動の場にいる子どもたちの、生き生きとした姿がいくつもあつた。今号の表紙を飾っているのも、その作品のひとつである。

一九八〇年当時、一、〇〇〇万人であつた難民が、現在では二、〇〇〇万人にもなつてゐることを聞くと、受賞の喜びも半減しますね。いったい、自分のやってきたことは、何だつたのかと……。現在の、難民が出るとマスコミが騒いで、人がワッと行って救援活動をやり、サッと引いてしまふというような対症療法的なことを、いくら繰り返してもだめだと思ふんです。すでに次のステップに來てゐるんです。なぜ、難民が出るのか？ その根本を正さなければ

だめなんです。西側諸国では、片方で武器を輸出しながら、片方で人道的援助を行なつてゐるのが現状です。NGOも、自国で武器を作らせない、輸出させないことにもっと目を向けてほしい。そういう段階にもう來てゐるんです。

NGOのボランティアの人たちも、ただかわいそうというのではなく、鋭い目をもつて、そういうことについて考え、議論して欲しいですね。

(小林氏談)



1992年 カオイダン難民キャンプ (タイ)
Khao I Dang Refugee Camp, Thailand



1992年 プレイタトゥ村 (カンボジア)
Pray Ta Touch Village, Cambodia

International Aid Activities as Seen by Masanori KOBAYASHI

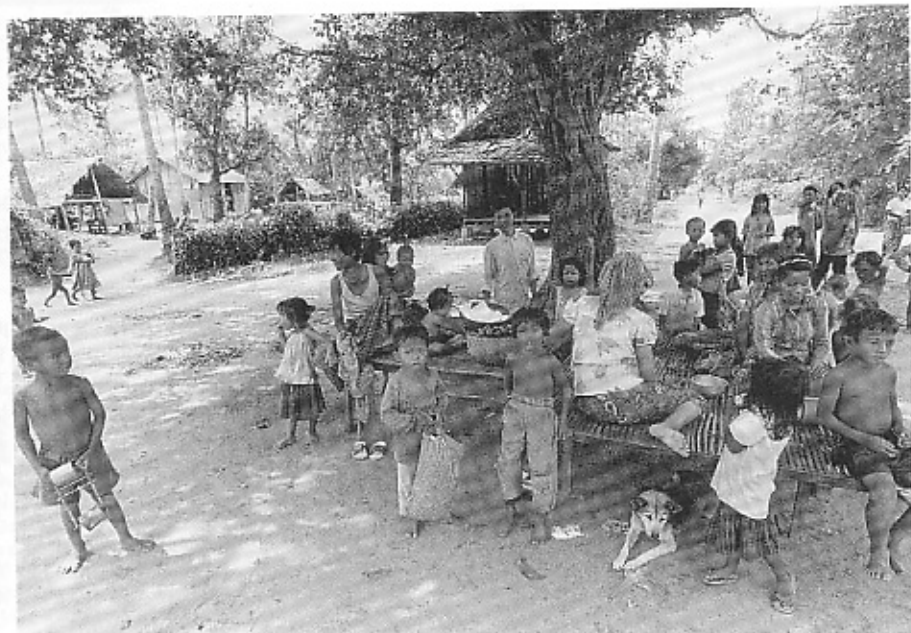
On September, Mr. Masanori KOBAYASHI, a photo journalist, was awarded the United Nations Photographer Award (given to photographers who contributed to the U.N. activities by the United Nations Environment Programme).

Mr. KOBAYASHI first took pictures of CYR when he visited the camp for Cambodian refugees 10 years ago. The works of Mr. KOBAYASHI show many lively and cheerful children involved in CYR's activities. He has covered the refugees of the world for many years. The photo used for the cover of this issue was taken by him.

"When I hear that the number of refugees increased to 20 million today from 10 million of 1980, my pleasure of receiving the award is damped. Whatever have I been doing all these years? I think repeating palliative therapy-like actions of today does not achieve purposes; mass media makes a big fuss over the refugees who emerge, people rush to the site and engage in aid activities, and then retreat all of a sudden. We are now in the next step. Why are there refugees? We should try and ask the fundamental questions. The countries in the West are exporting weapons on one hand, and extending humanitarian assistance on the other. NGOs should try harder to stop their countries from manufacturing and exporting weapons. We are now in this kind of stage.

NGO volunteers should think and discuss about these issues more shrewdly than just feel sorry for the refugees.

1992年 サムロンクロム村 (カンボジア)
Samurong Kraum Village, Cambodia



小林正典 (こばやしまさのり)

1949年、京都府生まれ。フリーのフォト・ジャーナリストとして、現在までに68か国を取材。1980年よりUNHCR (国連難民高等弁務官事務所) と契約を結び、世界中の難民・飢饉・子どもの問題の取材にあたる。日本写真家協会会員。

CYRの資金は どのように使われているか？

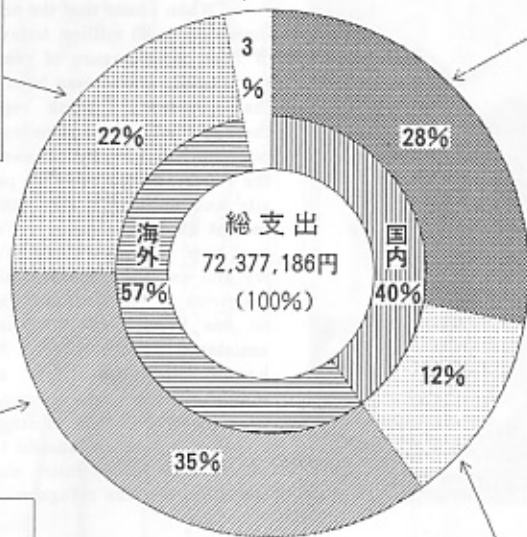
会費や寄付は
何に使われているの？



魚の養殖池（タイ）

と聞かれることがよくあります。
そこで、CYRに寄せられるさまざまな資金が、
どのように使われているのかを、
1993年度の決算をもとに、図に表してみました。

- タイ**
- ・管理費*
 - ・保育者の養成
 - ・無農薬の野菜作り
 - ・魚の養殖など



- その他**
為替損益など

- * 管理費**
- ・人件費（職員手当）
 - ・事務諸費（通信費、消耗品）
 - ・交通費など



- カンボジア**
- ・管理費*
 - ・保育園の運営
 - ・保育者の養成
 - ・織物の技術指導など

- 事業費**
- ・広報活動費（内8%）
 - （ニュース・レター、年次報告書
リーフレット、パネル作製
学習会開催など）
 - ・自立援助事業費（内4%）
 - （インドシナ定住者向け情報紙発行
交流事業など）



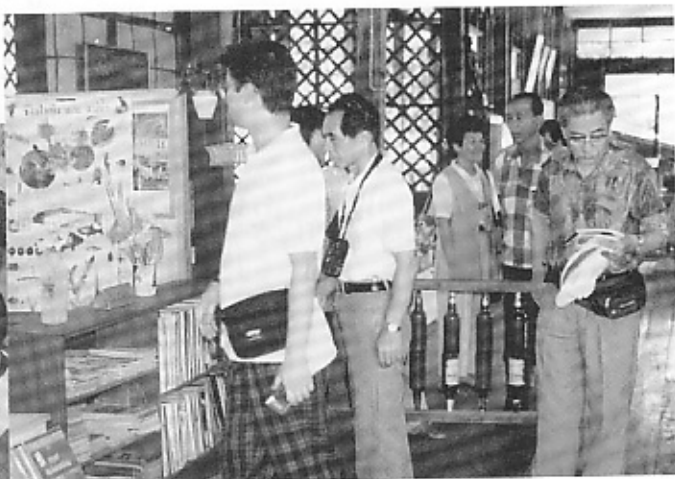
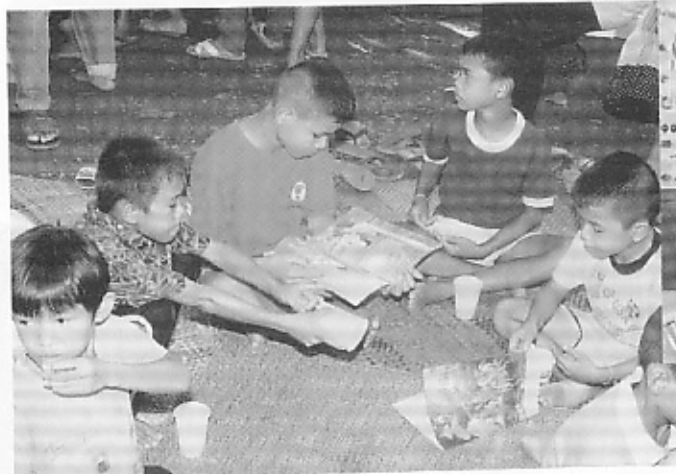
織物指導（カンボジア）

ここに図示した活動資金の内、会費は総収入のわずか六・八%にとどまっています。理想としては、三〇%と考えています。寄付金・助成金などは、必ずしも安定した資金とはいえず、これによって、継続性のある、長期的な計画を立てるのは、むずかしくなります。会費という、安定した資金を確保することによって、CYRの活動も、その場に根づいた息の長いものになっていきます。

今後も、ご理解とご協力を、ぜひお願いいたします。

パライ村で実を結ぶ国際ボランティア貯金

ソータイセリー小学校の図書室
Library in Sor Thaisery School



移動図書室
Mobile Library

大きな木の下の移動図書室

安間孝美

図書活動への協力については、タイのパライ村、ソータイセリー小学校を見学した。

図書室は、木造平屋の講堂のような建物の隅に、二〇〇三〇㎡を区切って作ってあった。

本は、きれいに補修してあり、子どもにもふさわしくない内容のものは整理されていた。しかし、本の数も少ない上に古いものが多く、図書室としてはやはり不十分と思われた。良い本を購入したくても、タイには日本の絵本のようなものは少なく、あっても高くて手が出ないとのことであった（一冊が約二〇〇バーツ＝八〇〇円）。国際ボランティア貯金が、そうした図書類の充実に活かされればと思う。

小学校の校庭の大きな木の下では、臨時の移動図書室も見せてもらった。移動図書室というと、自動車に本棚を取り付けたものを想像するが、まるでイメージが違った。日本かというと、昔、村によくやって来た紙芝居のようなものである。木の箱に本を入れ、集まった子どもたちに読ませたり、読んであげたりするもので、その時、子どもたちの栄養補給にと、豆乳が配られる。

タイの農村部の貧しさを感じさせられたが、集まって来た子どもたちの明るい笑顔からは、貧しさの中でもたくましく生きている様子が感じられた。

訪問の際には、村長さんが村の人たちと一緒に出迎えてくれたが、これはCYRの皆さんに対する村の人々の信頼の表れであり、そこでの活動が着実に成果を上げている証拠であると思った。

（東京郵政局貯金部第一営業推進課長）

一〇月一九日、郵政省国際ボランティア貯金関係者が、CYRのタイでの活動を視察した時の感想です。

The Grants for children's program in Parai Village

MOBILE LIBRARY UNDER A BIG TREE Takami ANMA

We visited Sor Thaisery School to see library activities. The library was a 20 to 30 m² space created by partitioning a corner of a one-storied wooden building which served as a lecture hall. The books were well repaired and those not fit for children had been removed. But there were only a limited number of books and many were very old. In order to function properly as a library, they need more books. I was told that there are not so many children's books available in Thailand as in Japan and they were very expensive (one book costs about 200 bahts or ¥800).

I believe that the Grant would be useful to increase the books. There was a mobile library opened under a big tree in the school

yard. When one speaks of a mobile library, one imagines an automobile fitted with book shelves. But it was entirely different. It was like a story teller of old Japan who went from one village to another telling stories to children by showing pictures. Books were placed in wooden boxes and children read them or had a book read to them. Soy-bean milk was given to children to supplement their meals.

I could feel the poverty of Thai villages, but smiling faces of children told how vigorously they were living their lives.

The village mayor welcomed us with other villagers, and we felt that this was an expression of their trust and confidence in CYR staff and a proof of how CYR activities were achieving steady success.

(Report on the inspection tour of CYR activities in Thailand by a staff of Japanese Ministry of Posts and Telecommunications in charge of grants to volunteer groups.)

国際社会のかけ橋をめざして

CYR—a Bridge to the Global Community

「幼い難民を考える会」は、難民になったカンボジアの子どもたちがけんめいに生きようとする姿に触発され、一四年前に組織されました。緊急援助のさなか、子どもたちが安全で安心できる場所をカンボジアの人たちとつくりながら、相手の自立を侵したり、管理する態勢に陥らないようにすることも学びました。

「難民の子ども」ではなく、人格をもった「幼い難民」として保育を受けた子どもたち七八三三人（一九八〇年六月～一九九二年一月）も、カンボジアを含むさまざまな国で新しい人生を歩んでいます。

CYRの活動は難民救済から新しい段階に入り、小規模の地域開発を手がけるまでになりました。タイの国境の村とカンボジアの村で、「考える会」が行なっているのは、難民の問題に影響を受けた地域の人びとの自助努力を支えることです。これは試みとしては小さなものに過ぎません。

しかし日本とタイ、そしてカンボジアを結ぶ国の交流は、日本に求められている国際社会での役割について、たくさんのお話を与えてくれます。

難民の問題に学び、これを出発点として、地域の人びとを知り、よりよい暮らしをめざしています。それは人びとが再び難民にならない、安定した社会をつくる道につながるからです。

“Caring for Young Refugees” was established 14 years ago to assist the Cambodian refugee children in a refugee camp. The children were then the source of our aspirations to be better members of the world community. We learned to care and respect each other as we lived with them.

The young refugees who attended CYR's Child Care Centers counted 7,833 since 1980 until the closure of

the camp in 1992.

Although in a small scale, CYR now operates in two countries; Thailand and Cambodia continuing to focus on a developmental work where spirit of self-help is essential, but where children and women are much in need of support for their well-being. CYR's aim is to encourage people to live with integrity and in harmony.

幼い難民を考える会
CARING FOR YOUNG REFUGEES

〒160 東京都新宿区南元町6-2

☎03-3353-9947 Fax 03-3353-9739

Head Office: 6-2, Minamimotomachi,
Shinjuku-ku, Tokyo 160, Japan

Bangkok: Red Rose Court #C-1, 110/6
Pradipat Rd. Bangkok 10400, Thailand
☎ 279-8837

Phnom Penh: No. 43 St. 306 Sangkat Beung Keng Kong,
Khan Chamkar Men
Phnom Penh, Cambodia
☎ 18-810261

発行人 ■ Publisher

深水 正勝 Masakatsu Fukamizu

編集責任者 ■ Editorial Director

世尾 勝 Masaru Sasao

翻訳 ■ Translation

大井 幸子 Suchiko Ohi

DTPデザイン入力印刷 ■ DTP Layout & Printing

亀田 万里 Mari Kameda

印刷 ■ Printed in Japan

三興印刷 by Sankei Printing Co., Ltd.

切り取り線

申込書

CYRへあなたのご支援をお寄せください

申込日	年 月 日	ご住所 〒
お名前	男・女	☎ 勤務先/学校名
(入会希望の方)		(寄付の方)
■ 会員になり、活動を支援します。		■ 活動支援のためのご寄付は、払込用紙に「寄付」と明記の上、ご送金ください。
正会員費 年10,000円(年 月～年 月)		
団体会員費 年30,000円(年 月～年 月)		
※会費/寄付の方共にご送金とは別に、この用紙を切り取って事務局宛にお送りください。		

会費/寄付金の振込先

① 郵便振替

口座番号 00110-8-36227

(払込方法に○印をおつけください)

② 銀行振込

第一勧業銀行 広尾支店 普通 057-1280817